心身障害学研究　Bull. Spec. Educ.
12(2)：69—75，1988

自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究IX(2)
——特殊学級および養護学校の自閉症児について——

渡部　匡隆*　　中矢　邦雄*　　前川　久男　　小林　重雄

当研究室で治療訓練を受けた後に特殊学級または養護学校に就学した自閉症児の経過を報告する。

対象児の学校での適応状態を見学や教師へのインタビュー並びにS—M式社会能力検査を用いて評価した。

調査の結果，次のことが指摘された。

(1)　4名中3名が高等部に進学した。1名は対人関係やコミュニケーションに後退がみられた。他の2名はより対人関係を促進するための指導の必要が考えられた。

(2)　各症例のコミュニケーションに新たな問題が生じ，特に獲得したコミュニケーション手段の維持が重要なテーマとなっている。

(3)　思春期に関する問題が起きており，性についての適切な指導とそれを表現する能力の獲得が必要と考えられた。

以上の3つの問題を中心にして考察が加えられた。

具体的な就労の可能性が出てきたものが2名おり，より社会的な随伴性を重視した指導が求められている。

キーワード：自閉症　　追跡研究　　学校適応

1．目　　的

本報告は，前8報（杉山ら，1979；大野ら，1980，1981；武蔵ら，1983；大野ら，1984；古田ら，1985；中矢ら，1986，1987）の続報である。就学前に当研究室で治療・訓練を受け，特殊学級または養護学校に措置された症例の経過を報告する。

2．方　　法

授業観察・担任とのインタビューにより対象児の学校での適応状況を評価した。社会適応状態を評価するためS—M式社会能力検査を実施した。また，家庭訪問の可能な場合は家庭での行動や就労への展望について母親にインタビューを行った。検査は昭和62年度1学期中に行い，調査は昭和62年9月中に行った。

3．対 象 児

各対象児の生育歴，訓練経過，就学後の状況はTable 1を参照。

4．症　　例

各対象児における検査結果は，Fig. 1を参照。

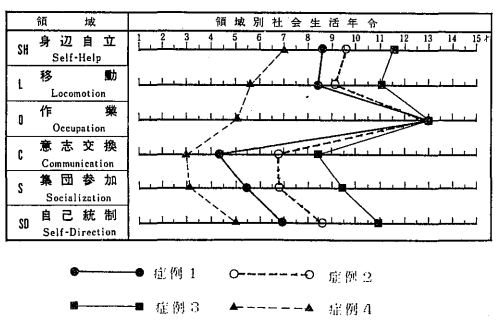

Fig. 1　領域別社会生活年齢プロフィール

*　心身障害学研究科

Table 1.　対象児の概要

	症例 1	症例 2	症例 3	症例 4
性別・生年月日	男子，1970. 5.	男子，1971. 1.	女子，1971. 5.	女子，1971. 12.
主訴	言葉の遅れ。 集団行動とれず。	言葉がない。 人の無関心。	言葉の遅れ。 落ちつきなし。	全体的な遅れ。 言葉がない。 人の顔を見ない。
生育歴	妊娠中・出産時問題なし。 生後８カ月「ア」「ウ」等の喃語。 始歩12カ月。 ２歳半頃に言葉が消失。 ４歳頃から言葉が増大。	妊娠中問題なし。 鉗子分べん。 乳児期は，喃語がなく，手のかからない子。 始歩13カ月。	流産予防の注射を受ける。 逆子で出産。 乳児期は，おとなしい子。 始歩10カ月。 何時間でも一人で遊ぶ。 呼んでも振り返らない。	妊娠中・出産時問題なし。 乳児期は，泣くことが少なく，手がかからない子。 あやしても反応なし。 始歩16カ月。
インテーク時状況	落ちつきがなく，奇声が多い。 簡単な指示には応じることが可能。 言葉は単語レベル，文字は平仮名が少し読める。 （1977. 6.）	発声は緊張した無意味音のみで理解語はない。 たまに視線が合うが，表情は固く人に無関心。 ドアが少しでも開いていると必ず閉める。 （1975. 10.）	多動。 呼びかけに反応なし。 働きかけに対する拒否反応が強く，接近すると奇声を発して逃げる。 （1972. 2.）	多動。 呼びかけに反応なし。 奇声がほとんどで，意味をなさない。 指遊びと人に対する回避反応が顕著である。 （1976. 7.）
訓練期間	１年６カ月	３年７カ月	４年１カ月	４年８カ月
訓練経過	1977. 9～1978. 3 弁別学習・命名学習・数の学習・トレーシング。 1978. 4～1979. 3 言語学習（単文－2・3語文，助詞・動詞の学習）・数の学習（10までの理解）・視知覚の訓練。	1975. 10～1977. 3 学習態度の形成。 聴覚入力系に問題のあることが明らかとなる。 視覚刺激（文字）による弁別・命名訓練。 1977. 4～1979. 5 文字学習・指文字の導入。	1974. 2～1975. 3 Y大にて個人指導。 1975. 4～1977. 3 学習態度の形成・言語学習（小会話，文字読み）・数の学習。 1977. 4～1978. 3 小集団指導。	1976. 7～1978. 3 学習態度の形成。 課題学習。 1978. 4～1981. 3 言葉の訓練（命名学習）。 （1980.1～1980.6訓練場面からの回避行動が現われ，その消去がはかられた。）
猶予および就学	猶予理由：自宅近辺の学校に受け入れる学級がなかったため。訓練開始は猶予決定後。 就学：地域の学校に促進学級が新設され，本児の就学に最適だと判断された。 1978. 4.就学（普通学級在籍，促進学級に生活の基礎を置く）。	猶予理由：聞き取りによる言語理解に問題があるため。 就学：自宅近辺に特殊学級等がなかった。 1978. 4.就学（普通学級）。	就学：1978. 4.（普通学級）。	猶予理由：児童相談所の判断，母親の希望による。 就学：幼稚園での行動に改善がみられたが，「重度知能遅滞を伴う情緒障害」という判定がなされ，養護学校就学を決定した。 1979. 4.就学（養護学校）。
現在までの状況	1981. 4.（４年次）より促進学級在籍。 普通学級への通級は行なっていない。 1983. 4.（６年次）より情緒障害児学級在籍。 普通学級通級（給食・体育）。	1980. 4.（３年次）に養護学校へ転校。	1978. 4.（１年次）授業参加を１時間とし，親がいっしょに登校。 1979. 4.（２年次）特殊学級へ移籍。	
現在の学校の状況	養護学校高等部	養護学校高等部	養護学校高等部	養護学校中等部
教師	3	2		3
生徒	10 （１年）	8 （１年）	8 （１年）	10 （３年）
カリキュラム	生活 （クラス） 作業 （適性別）	生活 作業 （能力別）	裁縫 （クラス）	生活 （クラス） 手芸 （適性別）

症例1 (M. M.)

1）学校での状況

今年度（62年度）より中学校特殊学級から養護学校高等部1年に入学した。本児の在籍するクラスは男子7名，女子3名，担任3名より構成されている。自発性を大切にし，繰り返し指導を行い身につけさせることを基にして指導がなされている。

本児は個別的な指示に対しかなり長い行動を遂行できる。全体的な指示にも自発的に動くことができ，わからないときは先生や友人をモデルとして活動できる。

教師や他の生徒に対する明確な回避はなく，誘いかけや手をつなぐことがスムーズにできる。先生の顔をのぞき込んだり，他児に話しかけようとしたりするなど対人的な関わりを始発して求める様子がみられた。

言語面では，あまり明確でない発声と教師の言葉の模倣，まれに友人の名前を呼んだりびっくりして発する“アブナイヨー”などの自発語が観察された。しかし，言葉によるやり取りはあまり見られなかった。

教師が近くにいて指導されている場面ではかなり集中して課題の遂行が可能であるが，遠くにいたり注目がなされなくなるとおしりをさわったりよそ見が増えるるなどの逸脱行動がみられた。

異性に興味が出てきており，女の子の手を握ったり足をさわるなどの行動が報告されている。

就労を目指し，昨年より近くのおせんべい屋さんに土曜日と夏休みに行っている。仕事はかなり意欲を持ってでき，昨年より複雑な仕事がこなせるようになっている。

帰宅後マラソンや洗濯，簡単な調理などを行っている。隔週でピアノの稽古に行っており，最近は近所で行われるコンサートに母と行ったりしている。

2）検査結果

“作業”は上限に達している。他の領域はほぼ8歳レベルであり，特に“意志交換”の遅れが著しい。古田ら（1985）の結果と比較すると，各領域で約1歳程度上昇している。しかし，全体的なパターンに変化はみられていない。

3）考　　察

対人関係や集団参加に改善がみられている。引続きこの面での改善を図るため，クラスの会話のあるものを本児の強化者とするなどの指導が望まれる。言語面では本児の発語行動に教師が無対応な場面が多く，本児の発語はコミュニケーション手段として適切に機能していない。これからの社会生活を考え，様々な場面を捉えた言語指導が求められる。逸脱行動については，本児に対する課題の設定などの検討を行った上で一貫した対応が必要であろう。思春期を向かえたことに対して家庭で一人でいる時間を増やすなどの対応がなされており，妥当な対応であると考えられる。

指示に従い，かなり複雑な行動をこなせるようになったこと，加えておせんべい屋さんの仕事も意欲を持ってできていることから具体的な就労の可能性が存在している。しかし，就労後の人間関係の上で言葉が大きな問題になると考えられ言語面での指導が重要になると考えられる。また就労の問題について家庭と学校との緊密な連絡が必要であろう。

症例2 (M. I.)

1）学校での状況

今年度（62年度）より高等部に進学する。クラスは男子6名，女子2名，担任2名より構成されている。本児を含む男子2名が本学中学部より，残りのものが中学校特殊学級より進学した。授業は能力別に編成された3つのコースにおいて行われ，本児は他の2名の生徒と共に中程度能力コースに属している。

体育では教師をモデルとして比較的上手に競技をこなす他，全体的な指示にもスムーズさには欠けるものの従うことができる。しかし，課題の遂行後や待ち時間に笑いながら寝ころぶなどの逸脱行動が多くみられ，寝ころんでは教師が引き上げるパターンが繰り返されていた。本児は寝ころぶと同時に“バツ”“ダメ”という言葉を発し指をペケの形にするなどの仕草がみられたが，それにはあまり自己の行動をコントロールするだけの機能を持っておらず，それに対応した教師の動きもみられなかった。

対人関係では，ダンスの際に女生徒や女性の担任に接近し，手をつなごうとしたりその前で踊ろうとする様子がみられた。しかし，それ以外の場面ではあまり関心を示しておらず，他者の働きかけに回避的な動きがみられた。

異性への興味がみられ，作業や学習中に特定の女性教師に対する接近やいたずらが問題にされて

いる。

家庭では，絵日記，スウェーデン刺繍，調理を行っておりそれぞれに進展がみられている。現在は，きれいに調理をするなどより社会性を重視した内容の指導が成されている。

通学は，バス・電車を用いて自主通学が可能になっているが，7月と9月に1回づつ駅のホームに降りたことが確認されている。

2）検査結果

“作業”以外は全体的に低いレベルにあるものの，古田ら（1985）の結果と比較すると各項目とも2から3歳程度上昇している。しかし，各項目間のパターンには大きな変化がみられず，“意志交換”と“集団参加”は一貫して低い。

3）考　　察

本児は対人関係，言語面などに停滞がみられる。本校は地域のニーズからかなり多くの人数を高等部に受け入れており，本校から進学した生徒が4人に1人という割合である。そのため，中矢ら（1987）において報告されたような他児や本児からの働きかけはかなり減少しており，中学部時代に形成されたクラスメートとの関係は消失している。その背景には，入学してからの期間が短いこと，能力別編成によりクラスメートと関わる時間が少ないこと，本校中学部から進学したものと特殊学級から進んだものとの能力差が大きいこと，中学部と担任が変わり指導方法が変化していることなどが挙げられよう。本児の対人関係の改善のため，生徒同士で行うことが必要な場面の設定やクラスメートをモデルあるいは本児の行動の強化者とするなどの対策が必要であろう。

指文字を媒介にして本児のコミュニケーションは中学部時代に大きな進展がみられた。しかし，現在，本児が自発する言語行動に対応が成されておらず，本児の身振りを基にした自己コントロールもむしろ他者の関心を集めるように機能が変化していることが考えられる。従って，現在本児に行われている音声言語の表出を中心にした言語指導に加えて，指文字を基礎にした非音声的な言語行動に対する見直しとそれに基づく指導が急がれる。思春期を向かえ，本児に異性への関心の高まると性的な対象として捉える方向に変化していることが感じられる。しかし，父親が教えた自慰行為をあまり好まないこともあり本児の行動は直接的な性の表現とは考えにくい。むしろ，異性への関心を適切に表現できるコミュニケーション手段を持たないことによる問題とも考えられる。従って，先の問題とも関連するがコミュニケーションの充実と女性教師との交換ノートによる異性に対する適切な指導などが求められる。また，本児のように表現に困難を持つ生徒に対する性の指導を学校や家庭などを含めて考えていく必要がある。

本児は調理など家庭では優れた能力を有しているが，それら家庭で好きなことや得意の技術が社会に出たときに果してどのくらいい維持されるかどうかは明確でない。今後，好きな事柄に，より社会的な随伴性を組み込んで行くなどの指導が必要である。

症例3（R. O.）

1）学校での状況

本年度（62年度）から仙台の私立養護学校に入学した。高等部3年，専攻科2年の課程より成り障害児を中心にした女子だけの洋裁専門学校である。1学年42から43名であり，それぞれのレベル（手先の器用差など）に応じて8名のグループに分けられ指導されている。全寮制を基本としており，生徒の半数以上が寮で生活している。また，本児はクッキングクラブに所属している。

本校は普通学級から入学した生徒もおり，それらの生徒が本児に関心を示し，共に行動したり世話をやいたりしている。授業中にわからないところを質問したり，課題ができたら先生に報告するなどの行動はみられているが，会話の未熟さや現在の学習内容には教師の手助けをあまり必要としないことから，対人関係の成立はあまり認められていない。また，中学校の時にみられたリーダーシップ的役割もとられていない。一方，“いい香りだね”と髪のことをほめられたのをきっかけにして，その先生を好きになりベタベタしたり追いかけたりしている。

寮での日課は，帰宅後，弁当や下着などを洗いおやつを食べその後自由時間になる。自由時間はおもに刺繍やモザイクアートを行っている。音楽やジグソーパズルなども行うが，他の生徒が多く使い，本児がやろうとして“ヤメテ”といっても抑制的な効果を持たず途中で中止されることがよくあり，現在はあまり行っていない。また，裁縫バサミなどの刃物は持込みを禁止されている。入学後太り始め，食べ方も中学までは遅い方であったが，現在はガツガツ食べそれもかなり速く食べ

ている。外出は禁止されているが，母の要求により月１回の外出が認められるようになった。

１学期は週に１度くらいの割合で葉書を出していたが，現在は少なくなっている。身だしなみは特に注意する必要もなくなってきている。小遣いはテレビ番組の本などを近くのセブンイレブンに買いに行くようにして使っている。日記はかなり以前から続けており，ノートをほぼ１ページ埋めることができる。しかし，反復した内容が多く，最近は字が雑になり漢字の書き順を略して書いている。

２）検査結果

全体的にCAより低く，中でも“意志交換”が低い。しかし，他の症例と比較すると各項目間の差は小さく，古田ら（1985）の結果よりも各項目で２から３歳程度の伸びがみられる。

３）考　　察

本児は，固執性の減少がみられるものの対人関係の面で停滞がみられる。これは新しい環境になったことが大きく関係していると考えられるが，あまりしつこいとその生徒に対して攻撃行動などもみられることから，学級内のクラスメートとよい人間関係の形成を目指した指導が求まれる。一方で，好きな先生に対する行動や，実習先で人間関係に悩むなど思春期と共に情緒的深まりが感じられる。辛いときや苦しいときに葉書を書いてその気持ちを紛らすなど，情緒的深まりとともにその気持ちの解消の仕方も妥当なものであると考えられる。今後，異性との付き合い方を含めた性に対する適切な指導が望まれる。

固執性の緩和に伴うだらしなさは特に目だたなくなってきており，むしろ行動面の広がりが感じられる。

学習面では，日常的な計算や読字・書字などが可能になってきている。社会生活に必要な行動レパートリィの獲得など中学までの指導の成果が伺える。具体的な社会生活が可能な段階まで来ていると考えられる。今後，労働と収入など実生活面での指導が重要になってくるであろう。

現在の養護学校は，本児にしっかりとしたところが出てきた反面，課題や対人関係，また，寮生活も自由度が小さいことなどの問題が挙げられる。今後，よりよい適応を目指し環境の整備が望まれる。

症例４（A. K.）

１）学校での状況

本児は現在，養護学校中等部３年である。クラスは男子４名，女子６名，担任３名より成る。本児は中学部１から３年までを適性別に分けた14名からなる手芸班に属している。また，係として昨年から連絡帳と給食袋配りを行っている。

本児は，比較的繰り返して行われる行動や課題が明確な場合には確実にそれらを遂行できる。また，他児や教師からの指示に従うことができる。

対人的な面では，本児に対して他の生徒から明確な働きかけはみられない。しかし，本児からは同じクラスの特定の生徒に対して微笑みかける，あるいは教師に自己の行動の終了に対して確認を求めるなどの行動がみられている。しかし，多くの場面において本児の自発する行動に対応が成されてなく，課題の終了や教師を呼ぶときに発する短い発声が無視されている場合も多い。また，課題の遂行とともに課題中のまち行動や自己刺激行動が教師の注目と関係しており，課題の切れ目に教師の関心が与えられた場合には次の行動へスムーズに移行できるが，そうでない場合は課題の中断や自傷行動に発展する傾向がみられる。

現在，手芸班ではスウェーデン刺繍を行っている。１本の糸を繰り返し縫う作業が続けられている。

２）検査結果

古田ら（1985）の結果と比較すると，各項目に１から２歳程度の進展がみられる。しかし，CAに比べれば各項目とも著しい低いレベルにある。また，他の症例とは若干異なったパターンを示しており，特に“作業”の遅れが顕著である。

３）考　　察

対人関係は停滞が続いているものの，特定の生徒と教師に対する注目や声かけが出現しており，わずかながら改善の兆しが感じられる。

手芸などの作業においては，ある程度まとまった行動が遂行できるが，作業が単調なことや見通しが持ちにくいなどの問題がある。武蔵ら（1983）において報告されているように，固執性の軽減を目指した課題の設定が大切であり楽しみながら，すなわち課題中に強化事態が存在するような内容を取り入れるなどの課題の工夫が望まれる。

本児のまち行動や，自己刺激行動が教師の注目を集めるという社会的機能を有していると考えられるため，課題の終了の申告などより強化されや

すい行動の形成が必要であろう。

中矢ら（1987）において指摘された，本児の自発反応に対して強化事態が伴っていないなどの教師の対応の問題が続いている。本児の目標行動の明確化と指導方法の再検討が求められる。

5．総合考察

今年度は，4症例のうち3名が養護学校に進学し，各症例をとりまく環境は大きく変化した。また，思春期を向かえ新たな問題が生じている。従って，以前から検討されているコミュニケーションの問題に加え，上記の問題について考察を加える。

1）コミュニケーションの問題について

これまで各症例についてコミュニケーション手段の獲得が大きな問題とされていた。しかし，各症例とも獲得した言語行動が必ずしも維持されておらず，獲得された言語行動が消失あるいはその機能を変えて存続していることが認められた。従って，これからはコミュニケーション手段の維持に重点をおいた言葉の指導が大切であり，家庭や学校場面で一貫し継続した対応が重要になってくるであろう。

2）思春期の問題について

3名の症例に異性への関心の高まりが伺える。症例3は会話が成立するため，よりわかりやすい形に置き換えた気持ちの表現が成されている。しかし，症例1と2は聞き手に期待されるような言葉の使用ができにくいため，女性への接触などの行為だけが強調される危険性がある。この面からもコミュニケーションの重要性が考えられる。異性とのつきあい方を含めて教師や家庭での適切な指導が望まれる。

3）高等部進学について

今年度から高等部に進学した症例は3名おり，2名は中学校特殊学級から，1名は養護学校中学部から進んでいる。明らかに後退を示した症例2を始め，どちらから進学するにしても高等部進学はかなり大きな影響を及ぼすと考えられる。しかし，就労を考えた場合人間関係の形成の面でよい機会とも考えられる。双方から進学したものの能力を生かした指導が望まれる。

付記：資料の収集にあたり進藤桂子さん（教育研究科）・青木暁乃さん並びに山本知可子さん（人間学類）の御協力を得ました。記して感謝致します。

文　献

1）古田真理他(1985)：自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究VI(2)，心身障害学研究，9(2)，113—121.
2）武蔵博文他(1983)：自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究IV(2)，心身障害学研究，7(1)，39—47.
3）中矢邦雄他(1986)：自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究VII(2)，心身障害学研究，10(2)，87—95.
4）中矢邦雄他(1987)：自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究VIII(2)，心身障害学研究，11(2)，35—41.
5）大野裕史他(1984)：自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究V(2)，心身障害学研究，8(2)，92—100.

Summary

The Follow-up Studies on School Adjustment of Handicapped Children with Autistic Symptoms IX(2)
——In Special Class Room/Special School for Mentally Handicapped——

Masataka Watanabe　Kunio Nakaya　Hisao Maekawa　Shigeo Kobayashi

Four autisitic children, who had been trained in our laboratory before their entrance into the primary school, are evaluated with regard to their adjustment to the class. The data are collected through the interviews with teacher/their mother.

The data pointed out the following problems.

(1) 3 out of 4 cases entered a high school grade oh special school. One showed retrogressive changes in his general performance and social behaviors. the others need the program to facilitate interpersonal relationship.

(2) There are Problems concerning the maintenance of communucation.

(3) Juvenile specific problems became a issue in 3 cases. They need the skill to express their emotion and the appopriate guidance for those problem.

2 cases show the prospect of employment and need the guidance for social contingency.

Key word: autism, follow-up study, adjustment to the class